

崇 武 館
館長 飛鳥宗一郎
(宗雄)

先人の言葉から学ぶ（その9）

諸行無常（2） 出典・・・大般涅槃經

3 文学作品と無常観

(1) 小説と第一印象

名作と言われる文学作品など、いずれも冒頭を書出し文が長く心に残るような名文で飾られていることが多い。何事も第一印象が大切なのは共通の課題である。

物語を進めるにあたり、最初の文章から全体の展開とおおよその骨格付けがなされる場合が多く、文章作法における手法の一つである。書出し文を読んで「アレッ」と感じ、次はドキドキする気持ちで続きを読みたくなるなら、作者の思う壺にはまったことになる。

例えば、東京大学など大学教授への出世街道を嘱望されながら、辞して作家へと転向した明治・大正期の文豪・夏目漱石（1867～1916年、本名は金之助）は、その意味からも達人の一人であったと思う。「吾輩は猫である」では、



夏目 漱石

吾輩は猫である。名前はまだ無い。

どこでうまれたかとうんと見当がつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。吾輩はここで始めて人間というものを見た。しかもあとで聞くとそれは書生という人間中で一番獰悪な種族であったそうだ。

また、同じく「坊ちゃん」なら

親譲りの無鉄砲で子供の時から損ばかりしている。小学校に居る時分学校の二階から飛び降りて一週間ほど腰を抜かした事がある。なぜそんな無闇をしたと聞く人あるかも知れぬ。別段深い理由もない。新築の二階から首を出していたら、同級生の一人が冗談に、いくら威張っても、そこから飛び降りる事は出来まい。弱虫や一い。と囃したからである。小使に負ぶさって帰ってきた時、おやじが大きな眼をして二階ぐら

いから飛び降りて腰を抜かす奴があるかと云ったから、この次は抜かさずに飛んで見せますと答えた。

「草枕」も好きな書出し文の一つで、

山路を登りながら、こう考えた。

智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくこの世は住みにくい。

住みにくさが高じると、安い所へ引き越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟った時、詩が生まれて、画が出来る。

まずはこんな風で、文章の良さと相まって見事な書出し文といえるだろう。このような文章に出合えば、主人公の性格付けや物語の進行に興味津々たる思いを抱くこと請け合いである。

漱石は、愛媛県松山市出身の歌人・俳人の正岡子規（1867～1902年）とも深い交友があり、同じ屋根の下に住んだ時期もあった。影響を受けたのはむしろ漱石の方だったようで、漱石は漢詩にも長けているが多くの秀句を残している。今回は、私の好きな三句を挙げておく。

「人に死し 鶴に生まれて 冴返る」

「菫（すみれ）程な 小さき人に 生まれたし」

「風に聞け 何れが先に 散るこの葉」

なお、漱石は紛れもない清和源氏の末裔である。清和天皇から6代目の孫となる源満仲（912～997年、又の名を多田満仲）の弟・満快（信濃国夏目荘の地頭）が直接の先祖である。

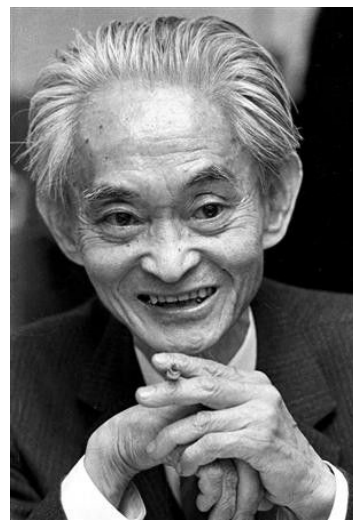
次に、川端康成（1899～1972年）であるが、彼は昭和43年（1968年）我が国初のノーベル文学賞を受賞した。代表作の一つに「雪国」があって、この書出し文も何かと引用されること多い。

国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。夜の底が白くなった。信号所に汽車が止まった。

「国境」「長いトンネル」「抜ける」「雪国」「夜の底」「信号所（駅でない）」「汽車が止まった」など、この小説全体を意識に入れ示しているような感さえする。

著名な小説から四つの例を挙げたが、作家たちは書出し文に意匠を凝らし、思い通りの文章が出来上がったとき、自ら酔いしれているようにさえ思う。

また、どの書出し文も今回テーマの「無常観」を感じさせるのは偶然の一致とは思えない。



川端 康成

(2) 第一印象と武道

小説の書出し文に限ったことでないが、第一印象は様々な場面で後に尾を引く。したがって、武道の修業や試合などにも無関係ではない。武道やスポーツにおいて影響するところ小考して見たい。

まず、武道やスポーツの試合（競技）である。スポーツではタイム（早さ）とか距離、重さや高さ、あるいは的中数によって勝敗を決する種目と、球技や格技のように審判員の采配によって運営され、勝敗が決定される物がある。勿論、武道試合も審判員の判断が勝敗を決める主因となり、審判員に運行の主導権を委ねている以上、決定に従わなければならないので、タイム等の方法で決まる競技のように杓子定規で計ることできない問題があって、審判員という人間が介在する球技と武道は人為的な性格が強いと考えてよい。タイムや距離等の競技で何らかの問題が発生すれば、計器類や計測方法の適切な条件整備により解決できる。しかし、武道・球技などの審判員が裁く場合は、審判員は絶対に中立公正であるといっても、何らかの拍子に第一印象や過去の成績を含む潜在意識が働く可能性はないと否定できない。だから、印象や記憶が判定に寸分も影響しないとは断言できない。

次いで修業（修練、練習）の場である。幾ら偉大な指導者といえども人間としての感情は存在し、しかも感情は時々刻々と移ろうものである。印象や個々人に対する認識評価を全て払拭することあり得ないので、それをもって稽古に影響しないはずがない。また、修業や稽古以外の対人関係だって同様に、時により個々人に対する対応に格差が生じかねない問題が残る。日ごろから絶対に公平を期すと心に決めている人であっても、完全に実行できないのが人間の性であり、これを釈迦は「煩惱」と呼んでいる。

しかし、もし相手（或いは誰か）に良い印象を持ってもらいたいと、評価を高める目的で媚び諂うならば、大きな間違いの基となる。私は、今年1月のこのコーナーで、「慙恥質直」という釈迦最後の説教「遺教経」について述べて、次のよう解説したのを思い起こしてほしい。

諂曲の心は道と相違す。是の故に宜しく応（まさ）に其の心を質直にすべし。当に知るべし、諂曲は但（た）だ欺誑を為すことを。入道の人には則ち是の処なし。この故に汝等宜しく応に端心にして質直を以って本と為すべし。

[括弧書きは筆者の捕註]

これを口語文にするなら、『自分の本心を曲げて人に媚びへつらう行為は、真の道を歩もうとする人（修行する人）のすることではない。だから、自分の心を真っ直ぐ正して歩むべきである。へつらいの心は、ただ欺きと偽りを招くだけと心得るべきである。仏の道に入った人は、欺きの心はあるはずもない。したがって、あなた方は心を正しく整えるように心掛けて、質実に真っ直ぐな生き方を基本とすべきである。』

(3) 古典作品に見る無常観

ア 無常観と釈迦の出家

先人たちは、文学作品の書出し文は「無常観」をもって表現していることが多い。人々にとって、今も昔も生死は深刻な一大事の問題だからと言えよう。

いかなる心で最後の時を迎えればよいかなど、健常な時分には言うに容易いけれど、いざその場面を迎えれば誰が冷静で居られようか。否応なしに迫りくる家族や愛する人との別れ、この世との決別は苦衷の最たるものであり逃れられない現実である。

釈迦は、生老病死（四苦）を感知したことが出家する切っ掛けであった。

「仏教とキリスト教の比較研究」（増谷文雄、1902～87年。筑摩書房、P7）に、釈迦自身の述懐を基にした経典から引用して書かれた文章を意識すれば次である。

私は極めて幸福であった。毎日が何不自由なく暮らすことできた。

私はふと考えて思った。人は、自ら老いるものであり、老いを免れ得ないのに、他の人の老いをみては、自分には相応しくないとって慚（は）じ嫌う。私もまた老い、それを免れ得ないこと知らなかった。人は病むものであり、病を免れるものでないのに他の病める者を見ては、己を忘れ慚じ嫌う。人は自ら死ぬものであり、死を免れぬ者でありながら、人の死をみては、己を忘れ慚じ嫌う。

私もまた死ななければならない身でありながら、死を免れ得ないことに今まで気付かなかった。このように観察したとき、自分のあらゆる生命の誇りは、ことごとく砕かれてしまった。

「慚じ嫌う」は、「心からいや（忌）がって嫌う」、「慚」は心にザクリと刻みを入れられた状況の字である。

以下の「平家物語」以降の課題は、それぞれ我が国古典文学の第一級作品であり、特段「諸行無常偈」や空手道修業と関連させて多く言葉を重ねる必要はないと思う。むしろ、読者諸氏の心の内に思い浮かぶ事柄をもって考察するなら、今後の生き方を洞察する課題が見つかるのではと思う。

イ 平家物語



平 清盛坐像（江戸時代）

薄暗い部屋に蝋燭の炎が幽かに揺らぎ、法師が奏でる「ボロン、ボロローン」と琵琶の響きが余韻を残す。吸い込まれるような闇の静けさの中で語られる平家物語言葉の節々は、さぞや聞く人の耳に無常の嵐が吹きすさび、幾度も不気味さと戦慄を走らせたことであろうか。

平家物語の書出しに掲げられる文章は、読者の大方が若き日に口ずさまれたに相違ない。私も山形大学1年の頃、小遣いを節約して購入したのが平家物語の注釈書で、58年前で500円だったと記憶している。

平家物語の成立について、吉田兼好（1283～1352年）は徒然草の第226段に『後鳥羽院の御時、信濃前司行長（しなののぜんじゅゆきなが、正没年不詳）、古の誉ありけるが（中略）。この行長入道、平家物語を作りて生佛（しょうぶつ）といひける盲目（の僧）に教え、語らせけり』とあるので、後鳥羽院の院政時代なら承久3年（1221年）までであり、吉田兼好の著述通りであれば1221年以前に成立したことになる。内容についても生佛やその後の人に

より書き加えられたであろうこと、想像に難くない。ただし、兼好の説とは違う作者を挙げている解釈もあるため、資料に基づく確証にまで至っていないのが現状である。



吉田兼好画像

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理（ことわり）をあらわす。おごれる人も久しからず、唯春の夜の夢のごとし。たけ（猛）き者も遂にはほろびぬ。偏に風の前の塵に同じ。遠く異朝をとぶらえば（中略）。近く本朝をうかがうに（中略）。まちかく（真近く）は六波羅の入道前太政大臣、平朝臣清盛公（たいらのあそんきよもりこう）と申しし人の有様、伝え承るこそ、心も詞も及ばれぬ。

[括弧書きは筆者の補註]

この平家物語は、「おごれる人も久しからず、唯春の夜の夢のごとし。たけき者も遂にはほろびぬ」という「盛者必衰」の有様が語られるが、「会者定離」とともに「諸行無常偈」に通じて常用される言葉である。

この物語は、第50代桓武天皇を祖先にもつ平氏の統領・平清盛（11代の後裔）の出自から始まり、合戦の様、清盛の死、平氏一族の滅亡までを綴る軍記物語である。一方、勝者となる源氏は、第56代・清和天皇（858～876年）の末裔である。

どの世界にも、今を盛となすときもあれば、いつしか衰えを迎える時が必ず来るもの。強いと口の端に上る第一人者であってもいずれはその座を降りなければならない。

衰えは差別なく誰の身にも降りかかると心得なければ、後世にみつともない評価を残すばかりである。世界チャンピオンは、永遠にその座に坐ってられないのと同じである。

著名な剣道高段者の語りがある本で読んだことがある。それは、『70歳過ぎても、



琵琶法師の画

血気盛んな剣士と渡り合い、引けを取らない稽古ができた。ところが自分の何かが違うなど感じ始めたのが75歳以降であった』と。70代や80代の剣士が後を切らさない剣道界は羨ましい限りだが、種目によっても年齢との関りがありそうに思う。空手道の場合どのように分析すればよいか、話題は後日に譲りたい。ただし、共通事項として言えることは、稽古の質と量の度合いは持続できる年数に影響するから、年を経て円熟味が増すという先人の言葉には関心を寄せる必要がある。

2年ほど前、プロスキーヤーの三浦雄一郎氏（1932年～）の講演を聞く機会があった。肩幅はそんなに広いと思えないが、厚い胸板と尻から太腿に掛けて見事に鍛え込まれた体躯の持ち主であった。彼の語るところによれば、60歳を過ぎた頃のこと、身長164cmに対して体重は85kg以上、緩やかな坂道も息切れして登れない有様で、それから一念発起してトレーニングに励み鍛え直したという。2003年5月に70歳3か月で世界最高齢のエベレスト登頂を果たす。記録はその後塗り替えられるが5年後にも登頂に成功（現在2番目の記録）している。来春、80歳で三度目の挑戦を行うと最近報道されているが、世の中にはこんな人がいるのである。

イ 方丈記

「方丈記」を著したのは鴨長明（かものちょうめい。又は、ながあきら。1155～1261年）は京都府左京区の賀茂御祖神社（かもみおやじんじゃ、通称・下鴨神社）を統括する神職の家に生まれるが、望んでいた神職に就けず、そのため出家して蓮胤（れんいん）と名乗った。平安末期から鎌倉時代初期にかけての歌人・随筆家である。日本三大随筆として「枕草子」（清少納言、966～1025年）、「徒然草」（吉田兼好著）と並び称されるのがこの方丈記である。



鴨 長明画像

長明は、晩年日野山（京都市伏見区）に一丈（3.3m）四方の庵を結んで住み著作したことから、これは「方丈記」と名付けられた。巻末に建暦2年（1212年）旧暦3月末に前記の庵にて記したと書かれ、京都府丹波町の大福光寺が所蔵する「大福光寺本」は長明の自筆本とする見方もあるが、違うだろうという説もあって定かでない。

次に掲げる書き出し文から始まり、安元3年の火災、治承の竜巻、養和の飢饉、元暦の地震などの災難について語り、次いで自らの草庵生活における悟りへの悩みが述べられて終わる。

ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかた（泡沫）は、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。世の中のある人と栖と、又かくのごとし。たましき（玉敷。美しく立派な様子）の都のうちに、棟を並べ、萱を争える。高き卑しき人のすまひ（住居）は、世々を経て尽きせぬものなれど、是

れをまことかと尋ぬれば、昔しありし家はまれなり。或は大家滅びて小家となる。住む人もこれに同じ。所もかわらず、人も多けれど、古見し人は二三十人が中に、わずかに一人二人なり。朝に死に、夕に生まるるならひ（習い、常の意）、ただ水の泡にぞにたりけり。

[括弧書きは筆者の補註]

特記される災厄の部分は、同じ無常でも人力ではどうにもならない天変地異などであり、外的な作用や力が人間世界を席卷する様が自らの経験に基づいて書かれ、自然界に対する人為は無力と化すという摂理を思い知らされる。

このことは、私たちに対し自らの意志や願望、あるいは信念が強いだけで事は成るものでないと教え、現代人に示唆するところ多い。

ウ おくのほそ道

俳聖とか史上最高の俳諧師といわれた江戸時代前期の俳人・松尾芭蕉（1644～1694年）は、三重県伊賀市に生まれ、北村季吟（1625～1705年）の門下である。芭蕉は門人の河合曾良（1649～1710年、現・長野県諏訪市出身）を伴い、元禄2年旧3月（1689年5月）、江戸深川の草庵・芭蕉庵と家財道具一切を処分して旅に出た。東北、北陸を回り、福井県敦賀を経て元禄4年旧9月に岐阜県大垣を出るまでを綴った全行程2400km（約600里）に及ぶ旅を、紀行文としてまとめたのが「おくのほそ道」である。

江戸から日光街道、奥州街道の第一宿で最初に詠んだ句は「行く春や 鳥啼 魚の目に涙」で、最後部は大垣を出発して江戸に向かう元禄4年旧6月であるが、結びの句は「蛤の ふたみにわかれ 行秋ぞ」であった。



この「おくのほそ道」は紀行文としても一級品ながら、旅の所々で曾良とともに詠んだ句が織り交ざられ、読む者にとっての興味と、併せて鑑賞の見せ場と言えようか。

左の写真は、旅の途中で『尾花沢よりとって返し、其間七里計なり』と記して訪れた山寺立石寺境内に近年になって建てられた芭蕉像である。ここで詠んだのが名句の一つ「閑かさや 岩にしみ入 蟬の声」である。

芭蕉は当時45歳で、全行程約2400kmの旅であること、時には一日に60kmを超して山野を旅するという異常な行動、18歳の頃伊賀忍者に仕えた経験などから幕府の隠密としての任務を帯び、従者の曾良はそのカモフラージュだったのではと噂されたが、芭蕉は忍者だったかという夢とロマンは、あながち嘘とも思えない気がしてくるから不思議である。

月日は百代の過客にして、行き交う年も又旅人也。舟の上に生涯を浮かべ、馬の口とらえて老をむかえるものは、日々旅にして旅を栖（すみか）す。古人も多く旅に死

せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にさそは（誘わ）れて漂泊のおもひ（い）やまず。海浜にさすらへて、去年の秋江上の破屋に蜘蛛の古巢をはらひ（い）て、やや年も暮れ、春立つ霞の空に、白川の関こえむ（ん）と、そゞろがみの物につきてこころをくるは（わ）せ、道祖神のまねきにあひ（い）て、もゝ引（股引）の破れをつどり、笠の緒付かへ（え）て、三里に灸すゆるより、・・・（後略）

[括弧書きは筆者]

過客は旧振仮名では「くわかく」、新振仮名では「かかく」で「ゆききの人」からここでは旅人のこと。江上の破屋は、深川は隅田川に近く元は湿地帯だった所から芭蕉は「江上の」と言っている。「白河の関」は、「勿来の関」「鼠ヶ関」と並ぶ奥州三関の一つで東山道の要衝である。現在の福島県白河市旗宿に遺構があつて、高地深山に鬱蒼と茂る原始の古木に囲まれている様は、今も昔の面影を残したままである。

人生を旅人に擬える思想は古から我が国にあつて、現代と違う意味で、未知の地域に対する人々の関心は絶大であつた。家財道具を売り払い無財産の身になり、執着の心を断ち切って芭蕉は旅に出たのである。

私たちの身の上にも、年の流れは誰かまわらず降り注ぐ。時とのたたかいは「光陰矢のごとし」（李益、748～827年。遊子吟）、「少年老い易く 学成り難し 一寸の光陰 軽んずべからず」（朱熹、1130～1200年。偶成）、「時は金なり」であつたりと、古人は時間の大切さを教えている。

エ 曾根崎心中（人形浄瑠璃）

江戸時代前期末の絢爛たる元禄期（1688～1703）に活躍した、人形浄瑠璃（文楽ともいう）作者・近松門左衛門（1653～1725、本名・杉森信盛）の名を知る人は多い。彼は竹本義太夫が座元を務める大阪・竹本座の座付き作者で、生涯に100以上の浄瑠璃作品を残したが、一度歌舞伎狂言作者に転向している。

約10年間の歌舞伎作者から再び竹本座に戻る切っ掛けとなつたのは、元禄16年（1703年）4月7日に、醤油商の手代（商家の番頭の下で働く使用人）徳兵衛と遊女のお初が、互い



曾根崎心中・死の道行

に思い合うひたむきな恋情と、抜き差しならない事情の葛藤から、現在の大阪市北区にある曾根崎天神ノ森での心中事件であつた。事件の発生を竹本座から使いの者によって知らされた近松は、これに応じて急遽人形浄瑠璃に仕立て上げ、丁度1か月後には上演に漕ぎつけるという離れ業をやつてのけた。実際にあつた出来事を題材とする新鮮さが話題を呼び、事件を目の当たりにしたかのような筋書き構成と、情景に適つた七五調の名文が相まって大ヒット興行となり、それまで積もり積もっていた竹本座

の赤字経営を一気に黒字に転換させるほどの大入りとなった。この中から、後世に残る名文句を次に記載してみよう。身の毛のよだつような臨場感は近松ならではのものといえよう。

この世のなごり、夜もなごり。死にに行く身をたとうれば、あだしが原の道の霜、一足づつに消えて行く、夢の夢こそあはれなれ。あれ数ふれば暁の、七つの時が六つ鳴りて 残る一つが今生の 鐘の響きの聞き納め 寂滅為楽と響くなり。鐘ばかりかは草も木も、空もなごりと見あぐれば、雲心なき水の音、北斗は冴えて影映る、星の妹背の天の川、梅田の橋を鵲の、橋と契りていつまでも、我とそなたは夫婦星、必ず添うと継り寄り、二人がなかに降る涙、川の水嵩も増るべし。

[括弧書きは筆者]

「あだしが原」は、はかない所の意で墓地のこと。「七つの時が六つ鳴り」は、午前4時のことで、鐘を6つ搗いて合図した。寂滅為楽は、「諸行無常偈」の終句で死をもって安楽が得られる意。「雲心なき」は、雲は無心に浮かぶ。「北斗」は北極星のこと。「星の妹背」は妻と夫、又は約束を交わした男女。「鵲」(かさきぎ)は、カラス科の鳥で羽毛に独特の光沢があつて、鏡の汎称、月の異称として用いられる。夫婦星は、七夕の夜、翼を並べ牽牛と織女が会うという伝説から。

「寂滅をもって楽となす」は「諸行無常偈」の最後の一節であつた。寂滅とは、本来は「生きる死ぬという現世の苦しみに対し、煩悩を全て滅却して絶対的な自由世界を至福とする涅槃の境地」の意味であるが、他にも死ぬことそれ自体を表わす場合がある。ここでは、『願いがかなわないまま生きて苦しむより、二人ともに死ぬことによって、この苦痛(苦土)から離れ、来世の楽土(あの世)に入りたい』の意思である。

『七つの時が六つ鳴りて 残る一つが今生の 鐘の響きの聞き納め 寂滅為楽と響くなり』とう名口調には、死を目前にした心の昂りが見事に表現されている。「苦痛から逃れる術として、死をもって絶対楽を得る」とも取れるわけで、更に近松は、演目の最後を『未来成仏うたがひ(疑い)なき、恋の手本となりけり』と結んだものから、この「曾根崎心中」上演後に心中事件が全国的な風潮を呼び燎原の火のごとく広がり、困惑した徳川幕府は「情死禁止令」を出すも効果薄だったという。

題材とした心中物語の善し悪しは別として、悩み苦しみから死をもって逃れることなど絶対にあつてはならない。生き、生き抜いて物事を解決する力を培い、身辺から嫌な思いを強要される「いじめ」を根絶し、互助共同の精神を養い、人間家族として一層「慈しみ」の心を持てる人たちの輪を広げるのが、武道教育の最たる目的であることを認識し、明日を開く読者皆さんのご協力とご支援を切にお願いする次第である。

(この項、終わり)